

# その他の文化財



## 大宮八幡宮神門（建造物）

（所在地）大南（大宮八幡宮）

砥部 16 谷（集落）の氏子が信仰する旧郷社の社格をもつ神門は、その造りがよく整っています。

神門は、当町大平の若宮社の櫓<sup>けやき</sup>の大木（周囲約 5 m）1 本を材に造られたといひます。

棟梁は、岩谷口の和泉岩次で、弟子らと昼夜兼行で 3 年 3 カ月の歳月をかけ、明治 3 年（1870）に造り上げました。

建築様式は唐様で瓦葺き。なお、唐様は、鎌倉末期に宋から伝えられた様式で、それまでの和様建築に対する呼称です。

細い部材を用い、簡素で落ち着いた風格を特徴としています。

神門の左右に隨身姿の 2 体（左大臣・右大臣）の像を安置しています。



## さいがんじ 西願寺（建造物）

（所在地）大南

砥部焼伝統産業会館の北側に隣接して、その堂宇<sup>どうう</sup>がありましたが、農業協同組合の建設時に現在の地へ移設しました。

西願寺の沿革は、『御替地古今集』<sup>おかえちこきんしゅう</sup>（寛政 12 年著）<sup>かんせい</sup>に詳しく記載されており、真言宗修験の寺（山伏寺）として繁栄していました。

現在、宝形造<sup>ほうぎょう</sup>の小堂があり、8 月 9 日に大般若経供養<sup>だいはんによきょう</sup>が行われ、上ノ山・戎区<sup>えびす</sup>の人々が参り、大般若経の転読が行われています。なお、当寺所蔵の大般若経は、1 巻より 200 巻まであり、住職有慶の呼びかけにより、寛政 3 年（1791）に寄進されたもので、寄進者の中に喜代八、信吉、重大夫など、九州路から来砥の陶工名も見られます。

砥部四国の本尊石仏（47・48 番）も安置されています。



## じょうやとう 常夜灯 (石造美術)

(所在地) 麻生 (理正院)・重光

麻生の理正院楼門前にある常夜灯は、<sup>こんびらだいごんげん</sup>金毘羅大権現に寄進されたもので、基壇からの高さが4.1mと大型です。<sup>くろうんもかこうがん</sup>黒雲母花崗岩でできた宝珠、笠、火袋、中台、竿、基礎、基壇からなっており、竿には、<sup>かえい</sup>嘉永三庚戌年 (1850) の銘、基壇には、麻生、大南などの多数の寄進者名もあります。

重光の常夜灯は往還道脇に在り、麻生常夜灯とほぼ同形で大型です。基壇には、「三嶋宮金比羅太神宮石鉄山 拾町組重光組 安全 <sup>あんせい</sup> 安政二乙卯年 (1855) 石工為吉□」の銘があります。石工為吉□は、砥部周辺地域の石工で室屋為吉□といい、麻生三島神社の鳥居などもつくっています。

これら常夜灯は、三島神社、金毘羅宮、石鎚山への、江戸時代の砥部の人々の厚い信仰を表しています。



理正院の常夜灯



重光の常夜灯

## せりごりんとう 千里五輪塔 (石造美術)

(所在地) 川登千里

千里本組の増田家墓地の上手に、長さ4mの石積基壇があり、その上に、室町時代の<sup>かこうがん</sup>花崗岩製宝篋印塔や江戸時代の墓塔群とともにあります。

千里の五輪塔は、安山岩製の同型のものが一対あり、高さ100cmほどです。下から、<sup>かえりばな</sup>返花座基壇、地輪、水輪、火輪、風輪とあり、空輪と風輪は一石でできています。

空輪と風輪にそれぞれ「空」、「風」と刻まれており、他の部位にも元はあったものと思われます。また、地輪にも銘文がありますが、剥落して不明瞭です。

空輪の先端が三角帽子のように大きく尖っていたり、地輪が低い点からみて、17世紀の江戸時代前期の供養塔とみられます。

背後の千里城址との関連は不明ですが、<sup>あわ</sup>併せて訪れてみたいものです。



とべじしこくはちじゅうはちかしよせきぶつ

## 砥部地四国八十八ヶ所石仏（石造美術）

（所在地）砥部町内

砥部の地四国八十八ヶ所の開設は、江戸時代の文政年間（1818～30）と伝えられてます。

四国八十八ヶ所札所の本尊石仏を、岩谷口（熊野神社）の1番から、千足の88番まで、町内各所に安置し、3日間で巡拝するものです。

石仏は、多くは黒雲母花崗岩で、高さは50cmほどと小型です。舟形光背石に、各本尊を簡素に浮き彫りし、札所番号と本尊名を像の左右に刻んでいます。五本松にある58番仙遊寺石仏は安山岩製で、明治31年の銘があり、このように欠損のため新設されたものもあります。

砥部地四国八十八ヶ所は、四国八十八ヶ所霊場をまわる事のできない人たちのために、弘法大師への強い信仰に応えようと砥部の先人がつくったものです。



五本松の札所  
（左から56、58、55、52、57、53番）

ななおれじぞうそん

## 七折地藏尊（石造美術）

（所在地）七折

伊予市と砥部町境である七折峠に堂宇が2棟あり、そのうちの宝形造地藏堂内に、高さ110cmほど、幅70cmの安山岩の柱状割石があり、その正面に地藏立像が浮き彫りされています。右手に宝珠、左手に幡を持っており、幡の下には「享和酉辛年（1801）」の紀年銘があります。下部は地藏堂床下にあり、60cmほど（像高40cmほど）が床上にあって祀られています。

峠への往還道は、江戸時代には、伊予砥や砥部焼などを郡中に運ぶ要路でした。地藏尊は、峠に祀られて、人々の安全を見守っていたものと言われてます。地藏堂横の堂宇には、奉納俳額がかけられていることから見ると、地藏尊への近郷からの参詣人は多かったことがうかがえます。



えんのぎょうじゃがんくつぎせきぞう

## 役行者岩窟座石像（石造美術）

（所在地）五本松（常盤木神社）

五本松の常盤木神社境内に祀られています。安山岩<sup>あんざんがん</sup>でできた浮き彫り像で、総高 42cm、像高 32cm あります。役行者の髭のない壮年の姿の倚像です。長頭巾<sup>ながときん</sup>を被り、右手に錫杖<sup>しゃくじょう</sup>、左手に経典をもち、岩窟の岩座にすわっています。下部の高下駄部分は欠損しています。簡略な彫りから江戸時代の作とみられます。役行者は、奈良時代の呪術宗教者で、日本古来の修験道の高祖です。

『御替地古今集』<sup>おかえちこきんしゅう</sup> 五本松の条に、「村、南山三十町程登、山神坊岩谷御座候、但奥ニ山之神、蔵王権現各一尺五寸位之石像、後略」とあり、元は蔵王権現石像とともに、五本松山中の修験寺院の山神坊（廃寺）にあったものと見られます。それを現在は常盤木神社に移しています。



おおみやはちまんぐうしめいし

## 大宮八幡宮注連石（石造美術）

（所在地）大南（大宮八幡宮）

この一対の注連石は、高さ 440cm、幅 42cm の黒雲母花崗岩製で、右柱に「無為」、左柱に「而尊」と三輪田米山書<sup>みわだべいざん</sup>の刻銘があります。

「無為而尊者天道也。有為而累者人道也。」という荘子の思想から引用したものと思われます。無為自然のままにありながら、それでいて非常に尊い働きをするものは天道（自然の法則）であるという意味で、米山の俗世を超越した心境の一面を語っているようです。

三輪田米山（常貞）は江戸後期から明治後期（1821～1908）に生きた松山市久米の日尾八幡神社神官で、その独特の書は高い評価を受けています。

裏面には、奉納された明治 22 年 11 月の紀年銘と、奉納者である周桑郡野田長芳の刻銘があります。



いわはなごりんとう

## 岩鼻五輪塔（石造美術）

（所在地）総津川口

とよみねじんじゃ

豊峰神社近くの岩場先端にあつて、1辺120cmほど、高さ55cmの青石の方形4段石積基壇の上に建てられています。

高さ117cmと、砥部では大型の五輪塔です。下から、かえりぼな返花座基壇、地輪、水輪、火輪、風輪、空輪からなる五輪塔で、空風輪は1石だけでできしており、全部で5石です。地輪正面と両側面に文字が彫られていますが不鮮明です。石質は、あんざんがん安山岩です。

空輪の頂部が三角帽子のように大きく尖っていたり、地輪正面が正方形である点からみて、17世紀の江戸時代前期のものとみられます。

修験道豊峰神社近くの岩場の上にあることから、経塚である可能性があります。



いざおじんじゃしんめいせき

## 伊雑神社神名石（石造美術）

（所在地）満穂

同神社の神名石は、明治24年の本殿改築後の同30年2月に建立され、神社名とともに、「明治卅年二月下旬建之氏子中」「米山書」と刻まれています。

のうひつか

みわだべいざん

能筆家で知られる三輪田米山（日尾八幡神社神官・1821～1908）の書で、らつかん落款とともに年月日まで記された碑は他所に例がなく、研究者の間でも高く評価されています。

大酒のみで幾多の逸話を残した米山ですが、ここでも当時77歳の米山は飲み過ぎで足腰が立たず、地元の人気力士「吉野川」にうしろから抱えられて一気に書き上げたというエピソードが残されています。（高さ約230cm、幅最大約128cm、緑色片岩）



とよみねさんさいけんのず

## 豊峰山細見之図（絵画）

（所在地）総津川口

総津の豊峰神社は、近世は蔵王権現社を中心とした神仏習合の社寺でした。

「豊峰山細見之図」は、豊峰山蔵王権現社を含む6坊6社の様子をあらわしたふかんず俯瞰図で、縦 45.5cm、横 34.4cm の和紙に摺られた、縦 39.0cm、横 28.5cm の黒1色の木版図です。

「細見之図」をつくった人は、図に、「立花園主人図」とあることから、総津村庄屋であった城戸氏とされています。つくられた時期は、上記のことや神仏習合の様子から江戸時代ではと考えられます。

背後の豊峰山（権現山）山頂には蔵王権現社が、行場にはセリワリ、鎖場が描かれており、石鎚山信仰を写した石鎚修験道の山岳信仰であったと見られます。木版で多数摺られ配布されたのですが、版木とともにその他の所在は不明で、貴重な1枚です。



じゅうさんぶつがぞう

## 十三仏画像（絵画）

（所在地）麻生（理正院）

この十三仏画像は、てんぽう天保 15 年（1844）4 月に、地元の門田浅五郎・門田伝之進兩人に寄進された、絹本着色、縦 1.7m、横 0.56m の軸物であり、描かれた年代は不詳です。

初七日から三十三回忌までの 13 回の死者の追善法事に本尊となる 13 の本地仏を基本として、三仏菩薩（阿闍・大日・虚空蔵）を加えて成立したものと考えられています。

十三仏の一般的名称は、不動明王（秦広王）釈迦如来（初江王）文殊菩薩（宋帝王）普賢菩薩（五官王）地藏菩薩（閻魔王）弥勒菩薩（变成王）薬師如来（太山王）観音菩薩（平等王）勢至菩薩（都市王）阿弥陀如来（五道転輪王）阿闍如来（蓮上王）大日如来（拔苦王）虚空蔵菩薩（慈恩王）です。



ね は ん が ぞ う  
涅槃画像 (絵画)

(所在地) 麻生 (理正院)

この涅槃画像は釈迦が涅槃（入滅）に入る状態を描いたもので、画家、製作年代ともに不詳ですが、江戸初期から中期の作とも伝えられています。絹本着色、縦 2.3m、横 1.23m の軸物です。

釈迦は、成道以来 45 年の間、インドを中心に、諸国説法巡行し、大衆救済に尽くしましたが、やがて、涅槃に入る時が来たのを悟り、クシナガラ城の外、沙羅双樹の間に床を敷き、最後の教誡を残し、頭北面西、右脇を下に横臥の姿勢で涅槃に入りました。80 歳でした。

この入涅槃のさまを表したものが涅槃画像です。

大きな如来像を取り巻き、菩薩や大衆が、悲壮の表情を表し、中には、慟哭<sup>どうこく</sup>する像もあります。



に っ こ う      が っ こ う   ぼ さ つ り つ が ぞ う  
日光・月光菩薩立画像 (絵画)

(所在地) 麻生 (理正院)

日光・月光の両菩薩は、薬師如来の補佐に当たる役目をなしており、薬師如来の信仰<sup>やくしによらい</sup>には、諸悪を除く効能をはじめ、七難を消滅するというものもあります。

利益<sup>りやく</sup>の如来と言えは薬師如来で、その立ち姿は、遊行の釈迦の姿にならって制作されたと言われており、歩いて人間に近寄る姿として表され、現実<sup>じつじ</sup>に如来が存在していることを感じさせます。現在も、毎年正月3日のお日待行事として、原町・高尾田<sup>たこおだ</sup>・麻生の地区では軸を掛けて祈祷をしています。

この画像の制作者は不詳。制作年代は江戸初期から中期ではないかと思われます。絹本着色、縦 1.7m、横 0.56m の軸物です。



だいはんにやしゅごじゅうろくぜんじんがぞう

## 大般若守護十六善神画像（絵画）

（所在地）麻生（理正院）

般若經の護持を誓った十六の善神で、大般若經の転読の時に本尊とするものの画像。

本来、夜叉<sup>やしや</sup>は形体が醜く、人を害し食する猛悪なインドの鬼神ですが、それが一転し、仏法の護持する善神となっています。

この画像には、右に不動明王、中央に大般若守護十六善神、左に愛染明王<sup>あいぜん</sup>が配されています。

釈迦の周囲に配されている十六善神像は、薬師のまわりを囲む十二の神将に類したものとされています。

制作年代は、天保<sup>てんぽう</sup>の頃（1830～1844）と言われており、画家は不詳。絹本着色で、縦 1.7m、横 0.55m の軸物です。



こんごうらかんりゅうぞう

## 金剛羅漢立像（彫刻）

（所在地）八倉（八倉集会所）

厨子に納められた立像は、像高 44cm で制作年代・作者は不詳です。邪鬼<sup>じゃぎ</sup>を踏みつけ四手・三眼で、炎のような頭髪の中央には、蛇局<sup>とぐろ</sup>を巻き鎌首を持ち上げた蛇が表現されています。像容からは明王像と考えることができます。明王は一般的に憤怒<sup>ふんぬ</sup>の形相で現われますが、この像はやや穏やかな表情に見えます。

四手・三眼から烏枢沙摩明王<sup>うすさま</sup>と観ることもできますが、上方に伸びる左手が欠損し持ち物も欠落しており、特定はできません。

羅漢は阿羅漢の略で、仏道修行によって煩惱を断ち切り菩薩となる前の高僧を指す呼び名であり、僧形で現われます。また、金剛は仁王（金剛力士）または金剛夜叉明王<sup>こうごうやしや</sup>を指す呼び名ですので、本来「金剛羅漢」の呼び名はふさわしくありません。この像が「金剛羅漢」と云われているのはなにか意味があるのかもしれませんが。



こうぼうだいしぎぞう

## 弘法大師坐像（彫刻）

（所在地）八倉（八倉集会所）

大師坐像は、麻生一宮大明神といわれる麻生三島神社の神護別常置とされる竜雲山八蔵寺に安置されていたものといわれています。

像高 40cm で<sup>しょうざ</sup>牀座に坐す像容ですが、両手首が失われています。江戸時代後半の四国八十八ヶ所霊場巡拝が盛んになることと関連し、現在も地元住民によって御大師講が行われています。

八蔵寺については『原町村郷土誌』に「浮穴郡一宮大明神、三島別宮…神護別当を置く、浮喜寺、長泉寺、三角寺、善福寺、蓮台寺、本願寺、長福寺、保泉寺、八蔵寺」の記録があります。『<sup>おかえち</sup>御替地<sup>ごきんしゅう</sup>古今集』に「麻生村 八蔵寺竜雲山といひ…真言宗高野山金剛三昧院の末寺。河野御取立ての由、<sup>げんろく</sup>元禄年中（1688～1703）の建立」の記録があります。



ふどうみょうおうぞう

## 不動明王像（彫刻）

（所在地）高尾田

不動明王は、大日如来の化身で、強い法力を持ち、切迫した事態を救う役割を持つとされます。髪は<sup>けんぱつ</sup>巻髪、右手に大きな宝剣を持ち、火焰を鳥（迦楼羅）の形に表現した<sup>こうはい</sup>光背（現在は分割され、像の側面に置かれています。）を背負います。一般的な不動明王像の表現の<sup>てんちがん</sup>天地眼（右目は天を、左目は地を向く表現で、天と地の間の一切の衆生を救わんとすることを意味します。）や右の牙を上、左の牙を下に出す口の表現ではなく、滋賀県三井寺の「黄不動画像」のように両目を見開き、口は上の歯で下唇をかむ表情で怒りを現しています。

像は、江戸時代初期の製作のようで、造りは荒く、一見して都風ではなく、地方の作風を表しています。

像を祀る<sup>どうう</sup>堂宇（金光院）を管理している家には『土佐の武士が、この地で襲われて果て、その遺言により、背負っていた像は、保存され、今日に至っている。』と伝わっており、毎月 28 日にはお参りもあったとのこと。



おお かくら なな おれ かわ い みや うち せん ぞく こ も ん じょ

## 大角蔵・七折・川井・宮内・千足の古文書（古文書）

（所在地）宮内（中央公民館）

大洲藩政期から明治期にわたる各区の貴重な多数の史料で、旧原町村役場に保存されていたものです。

以下、古文書に記録されている内容を挙げると、

大角蔵…入会山定書（享和元年）

七 折…田畑合高帳（弘化3年）

川 井…田畑畝方名寄帳（天保8年）

宮 内…砥部町庄土免目録（寛延3年）

通ル谷池新田新畑検地帳（享保6年）

宮内村諸事覚書（寛政11年）

千 足…田畑地坪帳（貞享4年）

諸村へ蒔敷人数操廻帳（天明4年）

大角蔵・七折・川井…寺社御改帳（寛政11年）

その他、地租改正関係や行政関係など、多数の資料が残っています。



ひ の け も ん じょ

## 日野家文書（古文書）

（所在地）大南（砥部焼伝統産業会館）・西予市（愛媛県歴史文化博物館）

新谷藩政期の古文書記録は少ないといわれますが、この旧庄屋日野家に残されている古文書は、史料として大変貴重です。

記録は藩政期から明治初期におよび、保存状態も良好です。記録内容を挙げると、田方水帳岩谷口村（寛政6年）、田方御検地畝方帳岩谷口村大平村（享保13年）、享保十七年季大飢饉に付祖先栄誉宗繁居士手帳、拾五匁札岩谷口村、岩平。御触状并諸回文写（嘉永—明治4年）。明治期には頼母子帳、祭札、礪南学校、日野喜一郎日記。

砥部焼については、唐津役所、同問屋等多数の文書記録が残っており、砥部焼関係には貴重な史料も含まれています。



にんぎょうかしら

## 人形頭（有形民俗文化財）

（所在地）宮内（中央公民館）

明治から大正・昭和にかけて、砥部小学校下では地域の人たちによって、人形を使った、いわゆるデコ芝居が行なわれていました。

現存する人形頭は大南の「砥部文永会」が管理していたもので、関連史料が3箱あり、拍子木、ブリキ製の鎧、小道具の刀、三味線、張り子の馬のほか、50体あまりの人形頭、書き割り、上演次第などが納められています。

浄瑠璃、三味線なども熱心に行われていたようで、『伊予浄曲名鑑』（大正13年）には、原町村8人、砥部村で村長を務めた亀井官次郎、阿部唯一ら4人が掲載されています。大南の長久治三郎が文永会会長を務めていたことも同書に記されています。



はいがく

## 俳額（有形民俗文化財）

（所在地）宮内（宮内天満宮）

宮内天満宮境内にある宮内神社拝殿には、3面の奉納された俳額があり、拝殿内右側の一枚板でできた俳額は、県内では初期、砥部町内では最古の安永6年銘（1777）のものです。

選者は松山藩士の中山五嶺（～1791）で、芭蕉の系譜につながる著名な俳人です。

願主に酔笑（宮内）、会林に互得、露泉（麻生か宮内）、仙柳（麻生）、慮山（原町）、玉声、舎陽（宮内）など記されています。

なお、献句35句、献句者16名が記載されています。

江戸時代中期における、砥部の地域の人々の教養や文化の高さがうかがわれるものです。



## し し ま い 獅子舞（無形民俗文化財）

（所在地）岩谷口・宮内・高市・総津

秋の祭礼に農村で行われていた民俗芸能で、古く中国（唐）から伝来しました。

五穀豊穡を祈り、悪魔払いなど信仰的なものになりましたが、農村によくとけこんだ民俗芸能・娯楽でもありました。

祭礼前は、早くから地区の若者が獅子宿で、夜遅くまで、トントコなどの舞や、太鼓の伴奏の練習を行いました。この太鼓の音を聞くと、祭りが近いことを思わせます。

獅子舞には、百姓夫婦や猿なども出て、その面をかぶった様子や、動作のこっけいさに見物人は笑いました。

獅子頭は重く、体力を要します。戦後社会の変化ですたれ、大平、高尾田、仙波等では復活しましたが、近年の人口減や後継者難で、現在は岩谷口、高市、総津、宮内で伝統芸能として伝承されています。



## むし おく き と う 虫送り祈禱（無形民俗文化財）

（所在地）川登

土用祈禱、虫祈禱などともいわれ、夏の土用に入ると間もなく、寺や庵などに集まって僧に拜んでもらい、輪になって南無阿弥陀仏を唱えて大数珠をくり、百万遍の念仏を誦します。

その後、子供たちによる虫送りとなり、鉦や太鼓をたたき「なんまんだ」と唱えながら、川下まで虫を送って、<sup>のぼり</sup>幟などを流して帰ります。

川登・川上区での土用祈禱は、<sup>けもんば</sup>毛物場の堂で<sup>えんせいじ</sup>円誓寺の住職に拜んでもらい、地域の者が、鉦や太鼓に合わせて虫送りの行事を行っており、藩政期から続いているものです。

しかし人口減や過疎により、万年地区では平成30年頃より休止しています。



だいはんにやくよう

## 大般若供養（無形民俗文化財）

（所在地）原町

家内安全・五穀豊穡を祈願して、大冊の大般若経を転読して、祈祷を行う行事です。

原町地区には、当初のものが継続されています。

伝えによれば、江戸時代のころ疫病が蔓延し、困った人々は、理正院の住職に疫病退散の祈祷を依頼したところ、大般若祈祷を教示され、地区民が大般若経を転読し、大般若のお札を各戸にはり、地区内の東西南北に厄除け札を立てたところ、疫病もたちどころに止んだといえます。

以来、この習慣は続き、毎年1月の第4日曜日に人々が集まり、僧侶を迎えての経の転読供養をし、経をおさめた経櫃をかついで各戸をまわり、家内安全、除災招福を祈っています。



おに こんごう

## 鬼の金剛（無形民俗文化財）

（所在地）総津・多居谷・高市

1月16日は念仏の口開けといわれ、この日は地獄の釜焚きをしなくてよい鬼たちが人間界に姿を現すと考えられていました。そこで集落の入口に大わらじを吊るすことで、「この集落にはこんな大きなわらじを履くやつがいるのか。とてもかなわん」と鬼を驚かせ、念仏札によって退散させるという故事にちなむ行事です。

疫病や災害などから集落を守る厄除けの行事として、広田地区の多居谷、総津、高市の各集落で現在も行われています。

道渡し、川渡しに縄を張り、その中央に大足半、飯すば、16膳の箸と杓子などを結びつけます。



総津・町裏地区

あ か さ か い ず み

## 赤坂泉（史跡）

（所在地）重光

重信川の左岸にあり、別名鏡泉ともいう名水です。

明和<sup>めいわ</sup>8年（1771）の大干ばつで、麻生と下五ヶ村の間に起こった水論争の矢取川事件は、義民、下麻生村組頭窪田<sup>くぼたひょうえもん</sup>兵右衛門が責を一身に引き受け、その処刑で幕を閉じる悲劇となりました。

その後、永年にわたる水不足を解消するために献身したのが、釣吉村（現松前町）の庄屋阿方万左衛門で、安永<sup>あんえい</sup>3年（1774）に赤坂泉開さく工事の世話人となり、難工事の末、10年後に完成しました。これによって、八倉・上野・徳丸・出作等の水田用水を満たすことになりました。

現在は、赤坂桜つつみ公園として整備され、春は桜の名所、夏は親水公園として訪れる人々の安らぎの場となっています。



か け ひ あ と

## 懸樋跡（史跡）

（所在地）八倉

懸樋とは、水を通すための竹や木の樋<sup>とい</sup>のことで、明和<sup>めいわ</sup>8年（1771）の水論争、矢取川事件の発端はこの懸樋の水の取り扱いにありました。両麻生は重信川から、古樋井手で水田用水を引き入れ、下五ヶ村はこれと平行した一の井手を用水路としました。両水路は矢取川の下を抜けて交差し、古樋井手の水路は一の井手の上を、懸樋で横切り水を流しました。

水不足のとき、重信川からの取水に不利な下五ヶ村は、古樋井手の懸樋のこぼれ水をもらうしか方法がなかったのです。

この水利構造が水論争の種となりましたので、両者間にそれを防止する協定も作られましたが、大干ばつの時には、それが守られず大騒動を引きおこしました。樋の構造など、協定の記録文書は残っています。



かわのぼりとうせきはっけん ち  
川登陶石発見の地（史跡）

（所在地）川登

『砥部磁器業誌』に「向井源治此地ノ製品良好ナラザルヲ患イ 文政元年川登ノ河底ニ白色ノ岩層ヲ発見シ之レヲ採用シテ改良スルヲ得タリ」と記されており、向井窯の祖である源治が良質な陶石を求めて探査の末、砥部川（余毛）の川床で発見（1818年）しました。

それ以後は、それまでの鉄分の多い砥石屑の使用を止めて、この良質の白磁原料陶石を使用することになり、やがて、砥部川右岸・余毛の陶石山の採掘がはじまり、陶器の需要に対応することができました。

陶石は、噴出安山岩が熱水による変質作用を受けたものと考えられます。大平から川下地区の河原には、陶石が川床に横たわっています。



たなかごんない ぼ ひ  
田中権内の墓碑（史跡）

（所在地）宮内（宮内墓地）

田中家は元中村姓で、大庄屋6代権内の時に中村から田中に姓を改め、田中喜三右衛門（権内は俗名）となります。正徳2年（1712）に大森彦七の供養塔を建てた人物でもあります。田中権内の墓碑は、宮内小学校のプール建設時に墓碑本体の棹石だけを現在の墓地に移したものです。現状は棹石中央部がひび割れ、頭部も前面の損傷が著しく、底面も重さで地下に沈んで寸法を減じています。

しかし、墓碑本体の棹石は重厚な方柱であり、戒名周辺の縁額は他の墓碑では中々見られない珍しい二重彫です。また、過去の写真では下部に蓮華紋の装飾が見られることから、本来は台石に棹石（本体）を載せたもので、大庄屋に相応しい立派な佇まいであったようです。

戒名は「黙翁道淵居士覚位」、棹石の右側面「田中権内五拾九歳」、左側面には没年「正徳三癸巳四月初二日」が刻まれています。



## いのうえもくべえ はか 井上奎兵衛の墓（史跡）

（所在地）宮内（宮内墓地）

井上奎兵衛<sup>てんめい</sup>は天明3年（1783）宮下村（現伊予市）に生まれました。

大洲藩の命によって宮内番所詰に赴任し、勤務に精励し治績もあがりましたので、村人はその徳を称<sup>たた</sup>えました。そのため、学識をしたって教えを願うものが多く、勤務の余暇に漢字や書道を教授し、門生が多いときには百余人にも及んだといいます。

学問に専念し、70歳を過ぎても子弟の教育にあたり、郷土の村民は敬慕してやみませんでした。万延元年（1860）78歳にして没したため、門生が集まり師を供養堂墓地に葬りました。墓碑は3段の台石上に、高さ83cm、横幅33.5×30.5cmの重厚な棹石<sup>さおいし</sup>（本体）を載せた重量感のあるものです。墓碑銘は「利順寿覚居士 井上先生墓 門人中 万延元庚申五月二十四日奎兵衛」とあります。



## い ぞ う はか 五三の墓（史跡）

（所在地）五本松

五三は、『砥部磁器創業誌』によると、磁器創業当初、筑前（福岡県）博多より門田<sup>かどた</sup>金治<sup>きんじ</sup>に招かれた陶工（仲田窯の祖）です。門田金治の経営の陶工として、また職人の指導者として尽力しました。

墓碑は、射場の城戸家の墓地にありましたが、昭和59年末、五本松仲田家墓地に移されました。碑は砥部焼関係の資料として重要なものの一つです。なお、中村は屋号で城戸家とは姻戚関係です。

墓碑の石材は花崗岩<sup>かこうがん</sup>製で、2段の台座上に高さ61cm、奥行19cmの棹石<sup>さおいし</sup>（本体）を載せています。形状は櫛形で正面に明瞭な縁額を施し、その中央最上部に梵字を刻み、その下に「一月道覚居士霊位」と戒名が刻まれています。棹石右側面に「中村五三」左側面には「文化七年庚午六月三日」と没年が刻まれています。墓碑は2段目の台石上部が丸みをもつ端正な佇まいです。



きたかわげかまあと

## 北川毛窯跡（史跡）

（所在地）北川毛

『大洲秘録』の大南及び北川毛の条に、陶器茶碗や鉢を造るトベ焼という、との記述があり、磁器制作以前の陶器を焼成した窯跡があったことが文献で確認でき、町内には北川毛窯の製品といわれる陶器が数多く残されています。

窯跡の位置は、酒井八四郎（如雲）らによって昭和 22 年に確認され、日用雑器から茶道具類までの陶器片が採集されたことが『砥部古窯址発掘の記』に記述されています。

現在も和合神社周辺から北端部の竹藪までの広い範囲に陶磁器片や窯道具が散布しており、特に丘陵中央部の墓地周辺には多くの陶磁器片や分煙柱など大型の窯道具が積み上げられています。先端の竹藪の中には平坦面もあることから、焼成室などの窯本体も良好に残っているようです。竹藪南側の平坦な場所には地元有志によって「とべ焼砥部焼発祥地」の碑が建てられています。



ひろたさいこ こうぐち

## 広田最古の坑口（史跡）

（所在地）仙波

江戸時代末期に大洲藩主である加藤公により、<sup>さるたに</sup>猿谷村小猿（現仙波）<sup>こざる</sup>で発見された銅鉾山の坑道入口です。採掘を始めたものの、産出量・産出額ともにふるわなかったため、数年で廃坑になりました。

明治 22 ～ 23 年頃から再び採掘が行なわれましたが、何らかの事情で閉坑するという浮沈を繰り返しました。坑口の近くには、動力機械用の基礎が今も残されています。

周辺一帯は銅鉾脈が縦横に走っていたため、国道 379 号沿いに変電所、鉾山関係者用住宅などが設けられ、広田鉾山では経営者が変わりながら、昭和 40 年代半ばまで採掘が行われました。

現在もトロッコのレールが一部残り、また、道の対岸には、斜め下に 2800m 掘り進んで海拔マイナス 300m まで達しているという斜坑口と、高さ 9 m のホッパー（鉾石取出施設）も残されています。



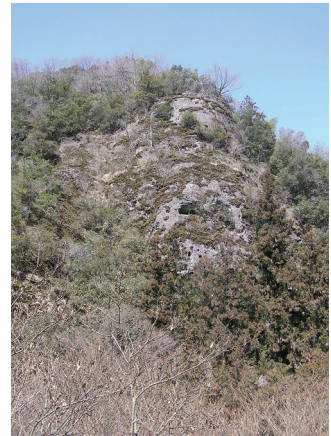
## さんしょごんげん 三所権現 (史跡)

(所在地) 玉谷

礫岩<sup>れきがん</sup>の岩場には風化によってできた大小いくつもの穴があり、弘法大師と天の邪鬼<sup>あま じゃく</sup>が争って穴を掘ったという伝説が残っています。

「九九王権現<sup>くじゅうくおうごんげん</sup>が祀られていることから、紀州熊野権現<sup>きしゅうくまのごんげん</sup>の流れを汲む、仏教派であったものと思われる」(『広田村誌』)。また、江戸時代後期の書物である『御替地古今集<sup>おかえちこきんしゅう</sup>』および『大洲旧記』にも、高さ 60 間 (約 108m)、横 30 間 (約 54m) で、上の宮、中の宮、下の宮があったが、上の宮はすでになく、下の宮は険阻で行くことは困難と記載されています。

中の宮には祠が祀られており、「貞和貳年<sup>じょうわ に</sup> (1346・北朝年号) 九月五日玉谷村岩谷寺」と記された板木が残っています。



## とうせき 陶石 (史跡)

(所在地) 玉谷

砥部焼の原料となる陶石<sup>かわのぼり</sup>は川登地区で最初に発見され、かつては旧砥部町でも盛んに採掘されました。平成期には広田地区でも 2 業者が採掘を行っていましたが、現在は上尾峠<sup>うえび</sup>にある (有) 伊予鉱業所が砥部町内で唯一稼働しています。

同社が所有する陶石山の規模は大きく、約 10ha に 100 万 t の埋蔵量が見込まれます。陶石の質は、コシがあって白く焼き上がるカオリン系と、安定した性質をもつセリサイト系に大別され、同社の陶石はカオリン系です。

同社の陶石は、陶磁器の産地である瀬戸や有田などに出荷されるほか、近年は砥石としても利用されています。



## ちょうしだき 銚子滝 (名勝)

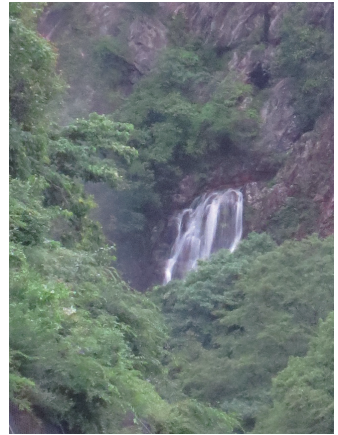
(所在地) 川登

山の中腹から岩間をぬって湧き出る水が、銚子の口から流れ出るように見えたことから、名前がついたといわれます。

古い記録には、「幅十間（約 18m）高さ二十丈（約 60m）。一带奇岩怪石に富み、山吹その他の花も多く紅葉の色も美しく、冬季滝水岸壁に飛散、氷結する美観は格別、四季遊覧客が多い」とあります。

安山岩<sup>あんざんがん</sup>の大石柱が重なった絶壁から滝水が白布を引いたように落散する眺めはすばらしく、滝水の落ち込む溪流の兩岸の安山岩柱状節理<sup>ちゅうじょうせつり</sup>の眺めも見事な景勝地です。

大正 15 年の海南新聞<sup>かいなん</sup>による「伊予十二景」読者投票では 5 位に選ばれています。



## せんばがだけ 仙波ヶ嶽 (名勝)

(所在地) 仙波

海南新聞社主催の「伊予十二景」選定の 10 位に選ばれた景勝地で、選定を祝して記念碑が建立され、現存しませんが、吊り橋が架けられました。

鉄石英片岩<sup>こうれん</sup>、紅簾片岩を母岩とし、春は岩ツツジ、初夏はセッコクや風蘭、秋は紅葉が美しい溪谷です。

小さいながらも、激流が造り出す甌穴<sup>おうけつ</sup>や深い淵など溪谷美にあふれ、多くの観光客を集めています。

かつては冷氣漂<sup>ゆうこく</sup>う幽谷で交通も不便だったため、天狗や龍が出没したという昔話や、向かいの継子嶽には、実子と継子をめぐる哀れな物語が残されています。

平成 30 年 7 月の西日本豪雨により遊歩道の橋が損壊し、令和元年度に復旧工事が行なわれました。



## まき の き 榎の木（天然記念物）

（所在地）麻生（理正院）

南側の木の樹高 19.0m 胸高幹周 220cm

北側の木の樹高 18.5m 胸高幹周 195cm

2019 年 7 月測定

イヌマキはマキ科マキ属<sup>じょうりよくこうぼく</sup>の常緑高木で、省略してマキと呼ばれています。関東南部以西・近畿・中国・四国・九州・琉球<sup>しゅういしゅう</sup>に分布しています。雌雄異株<sup>めいぎ</sup>で 6 月頃に開花し、雌木では 10 月頃に球形の果実が赤く熟し甘くて食べられます。

理正院の境内北側入口の観音堂<sup>かんのんどう</sup>前の台地に、2 本のイヌマキの古木がそびえています。一対で植えたかのように見えますが、自然に生えた古木であると言われています。

なお、この木の傍らにある小堂の観音堂は、山号竜池山、本尊は木造の観音像で、郡中西国 26 番、法華寺播磨国と記されています。



## そ て つ ぐんせい 蘇鉄の群生（天然記念物）

（所在地）麻生（三島神社）

標準和名 ソテツ

樹高 東側の木 3.7m 西側の木 3.8m

葉張り及び幹数 東側の木 葉張り 6.5m 6 本の株立  
西側の木 葉張り 4.0m 7 本の株立

蘇鉄（ソテツ）は裸子植物<sup>らし</sup>ソテツ科ソテツ属で、中生代（2 億 5 千万年前～6 千 5 百万年前）に栄えた植物です。南九州・琉球・中国南部に分布しています。

麻生の三島神社は和銅 5 年（712）に創建されたと伝えられています。境内に入ってすぐの南側に見事な蘇鉄があります。大きな木 2 本と小さな木の群生<sup>ぐんせい</sup>があります。東側の木は枝張りが大きく、見方によってはヤマタノオロチのようにも見えます。樹齢は 300 年以上と言われているが、樹勢は旺盛でたくさんの萌芽が見られます。



まんねんかき

## 万年柿（カキノキ）（天然記念物）

（所在地）万年

樹高 12.2m 2019 年 7 月測定

3 本の株立ち 胸高幹周 130cm、100cm、80cm

根元に腐りがありますが樹勢は旺盛です。

カキノキはカキノキ科カキノキ属の落葉高木です。

万年柿は砥部川の上流域の万年地区に古くからあった渋柿です。万年柿は小型で、干柿にすると甘くて味が良く、以前は町内各地で栽培されていたそうです。

地元の言い伝えによると、弘法大師がこの地に来られ、さし上げた柿を食した時、種がのどにひっかかって腹をたてたといわれ、それ以来、種がなくなったといわれています。

実は、この柿は単為結果で、種子がなく干柿専用の珍果であり、いつの頃から小田柿といったものを取り寄せて植えたと言われています。

以前の生産が多かった時は、地区内の各所に干柿をつるした風景が見られましたが、現在は少なくなっています。



りしょういんけいだい じゅそう

## 理正院境内の樹叢（天然記念物）

（所在地）麻生

樹叢とは自生した樹木が密生している林のことです。理正院の境内の樹叢は寺院の建物と金毘羅大権現の社殿を取り囲むように成立しており、鎮守の森とも考えられます。

社寺の建物の西側の山地に、胸高幹周が 100cm を超える、シイやカシ・ヤマモモの高木が林立し、その下にヤブツバキなどの中木、さらにその下にシイやカシの稚樹が生育しています。境内から尾根の広場に通じる山道は階段も設けられ、樹叢を観察しながら展望広場まで登ることができます。貴重な照葉樹林といえます。



## ふるいわや      じゅそう 古岩屋の樹叢（天然記念物）

（所在地）岩谷（岩谷山）

弘法大師が教えを広めるために立ち寄ったとの古い言い伝えのある岩谷山は、俗に古岩屋といい、靈巖寺（靈岩寺）の北側の小谷を越えた所に上り口があります。

「古岩屋山巡路案内図」を見て林内に入ると、胸高幹周100cmを超える、アラカシなどの常緑広葉樹<sup>じょうりよくこうようじゅ</sup>やスギやヒノキの針葉樹<sup>しんようじゅ</sup>、ヤマモミジ、コナラ等落葉広葉樹<sup>らくよう</sup>が自生しています。

尾根のやや明るい林にはアセビ、ツツジなども見られ、多様な樹種が混在しています。

木に隠れ林外からは見えませんが、そこかしこに奇岩や岩穴があり、それを結ぶように山道が巡り、四国八十八ヶ所に札所名を示した石仏が安置されています。



## やまもも      き 楊梅の木（天然記念物）

（所在地）宮内

標準和名 ヤマモモ 漢名 楊梅

樹高 4.44m 胸高幹周 300cm

二股の木で、大きな空洞があり2本の枝には金属板で保護覆いをしています。

2019年7月26日計測

ヤマモモはヤマモモ科ヤマモモ属<sup>じょうりよくこうぼく</sup>の常緑高木で、関東西南部以南から四国・九州・台湾などの暖地に自生していますが、庭木としてもよく植えられています。また樹皮は草木染の茶色染料として使われています。花は4月頃に開花し、雌雄異株<sup>しゅういしゅ</sup>ですので、雌木には6～7月に暗赤色の実をつけます。実は甘く食用になります。

このヤマモモの古木は旧宮内村の庄屋家の邸内にあります。かつて樹高は15mありましたが、現在は剪定<sup>せんてい</sup>され低くなっており、幹には大きな空洞がありますが、それでも太く張った根や幹は威容を誇っています。



しゅういしゅ      めぎ  
雌雄異株ですので、雌木に

おおいだに

## 多居谷のエノキ（天然記念物）

（所在地）多居谷

樹高 21m 胸高幹周 489cm

2019 年 10 月測定

エノキはニレ科エノキ属<sup>らくようこうぼく</sup>の落葉高木です。暖帯・温帯で本州、四国、九州に分布しています。実は食べることができ、小鳥などが好んで食べるので種が糞として運ばれ、山地や平地に広く生育しています。エノキの葉は国蝶オオムラサキの幼虫の餌となります。木材はエノキタケの原木としても使われています。

愛媛県内で報告されているエノキの大本は、西条市にある「土田之木のエノキ」とこの木の 2 本のみですので、非常に貴重な木です。



おおいだに

## 多居谷のサザンカ（天然記念物）

（所在地）多居谷

標準和名 サザンカ

樹高 8.6m 胸高幹周 212cm

2019 年 10 月測定

サザンカはツバキ科ツバキ属<sup>じょうりよくしやうこうぼく</sup>の常緑小高木です。秋から冬にかけて花をつけます。九州や四国に分布していますが、庭木や生垣などとして広い地域で植栽されており、多くの園芸品種があります。

この木は庭木として植えられたものです。樹齢は不明ですが、胸高幹周 2m を超えるサザンカは、環境省の「巨樹・巨木林データベース」には千葉県と神奈川県にある 2 本のサザンカしか掲載されていないので、非常に貴重な木です。

やや樹勢が衰えていますので、適正な管理により樹勢回復が望めます。



おおひら

## 大平のムクノキ（天然記念物）

（所在地）大平（大平集会所）

樹高 35m

胸高幹周 800cm

ムクノキはニレ科ムクノキ属<sup>らくようこうようじゅ</sup>の落葉広葉樹で高木となります。関東以西の温暖な地域に分布し、実は秋に黒く熟し、甘みがあり食用となります。材は折れにくく、割れにくい<sup>く</sup>ため器具材として用いられ、葉は乾燥させて漆器や象牙の研磨に使われています。

大平のムクノキは大平集会所の広場にあり、国道 33 号の三坂道路から木の上部を見ることができます。平成 2 年に財愛媛の森林基金が発行した「えひめの巨樹・銘木」にも掲載されている銘木です。



せん にん づ か

## 千人塚（埋蔵文化財包蔵地）

（所在地）総津

<sup>さくらやすば</sup>

桜休場といわれるこの一帯は、古戦場だったといわれます。

千人塚の建造年は不明ですが、戦没者の霊を弔うために、立花城跡を望む旧街道沿いに造られました。2 段の基壇の下部は 3.9m 角、高さ 0.3m、上部は 1.5m 角、高さ 0.9m の青石平積みで、上部に瓦製の祠が置かれています。

総津立花城は土佐の長宗我部軍または秀吉の四国平定の際に落城したと伝えられ、城から逃げ落ちた武者がここで休んでいた時、急襲されたといわれます。この伝説を裏付けるように、開墾の際に人骨や刀剣・武具などが見つかったという話も伝わっています。

瀕死の武者が虚空蔵峰<sup>こくぞうみね</sup>の尾根道に残した杖が木になったという「小米桜」伝説の地でもあります。

平成 13 年の芸予地震で一部損壊したため、同年に旧広田村観光協会により修復されました。



たちばなじょうあと

## 立花城跡（埋蔵文化財包蔵地）

（所在地）総津

総津城、橘城の別名があり、河野氏の配下にあった大野氏が治める久万大除城の枝城として、戦国時代末期に築造されたといわれます。

『大洲旧記』『大洲秘録』『伊予温故録』などでその存在は確認されており、初代城主の大野直澄（立花三郎兵衛）は土佐長宗我部氏との戦いにおいて笹ヶ峠で討ち死にしたと記録に残ります。2代直周の代に、長宗我部軍の前に落城したという説のほか、秀吉の四国平定で下城したとも伝えられますが、確たる史料は発見されていません。

城名は初代城主にちなむとも、山の端の小高い場所を意味する「立つ鼻」「立つ端」からともいわれ、周辺に「馬場」「はがやしき」などの地名が残っています。

